

卷之九

九

月 日	購 入 號	種 別	函 番 號	一 號
33/13	月	國		號

919.5  
338  
Vol.9

滋賀縣立圖書館  
草稿藏書印

常山紀談卷之九目次

- 一 黒田家岐井谷合戦の事 幷 小川傳右衛門フガ 村太郎ハラ 潤井キタニ
- 一 友房トモ 千升チヨウ を斬スル 事
- 一 豊岡トヨトミ 関白シカクホ 小條征伐コウザイ 出陣の事アツジン 附 本多大重ヒロタケル 次放言ハラグニ の事
- 一 井伊直改トヨササキ 関白シカクホ を討スルんと言マサニ 事アリ
- 一 鳥井源八トリヰ 郎先セントウ 士志シヂ を論スル 事アリ
- 一 南部タニブ 越後攻口タマシナ の事アリ
- 一 上様ウサギ 日和ヒヨリ とリ 事アリ
- 一 伊奈熊経イナクニ 父チヤウ 兵糧ヒヨウリヤウ を取スル 事アリ
- 一 蒲生氏鄉の陣夜討シナガタ 事アリ 幷 氏郷金キヨシガタ の三階夢籠サンガイヌガタ 馬印ネジム を免メテ

一 武藏國八王寺城落る事

一 大音若益雨森彦三郎功名の事

一 信雄卿那須より謫せらるる事

一 坂部岡江雪免る事

一 関白鶴岡参詣の事

一 関白宇都宮より佐母天徳寺とお徳の事

一 蒲生氏之大志の事

一 奥州葛西大崎一揆の事

一 蒲生家の士大将軍兵調練の事

一 氏郷伊達家の刺客を免まること

一 氏郷佐木が鎧を細川忠興より贈る事

附黒塚の歌

一本多忠勝万喜が舊卡を呼出され一事

一 東照宮武田小條の跡御制度の事

一 東照宮武田の舊卡を召て序物語の事

一 東照宮物具御物語附小舟と木笠の事

サガキ

シサ

タカヒコ

一 東照宮相模媛御ちゆりの事

タカヒコ

タカヒコ

タカヒコ

タカヒコ

タカヒコ

タカヒコ

タカヒコ

一本庄正宗の刀ひ事

一 曹の名様カネ有ナサグ事

一 伊藤七藏高名の事イトウタカシマニコトノモノ

一 井伊直孝用意オホタカヨウイ事

東洋宮

金剛林キンゴウリ

金剛雷林キンゴウライリ

東照宮ヒガラノミコトノミコト

東照宮守田ヒガラノミコトモロト

本多源氏ヒムダガタニ

## 山紀談卷之九

備前國

湯浅新兵衛元禎輯錄

○秀吉黒田勘解由孝隆ヒヨウジクラダカンガイユヨシタカアゼンノコトヲ与へらましよ一揆イツギ、  
よ起オカスる中キナミも岐井谷友房キヰヤマヨウボウハリと下野シモツケ宇都宮ウツノミヤ三郎友銀トモキチが  
次男ジナニ兼倉カマツクの比ヒより地チを領ル一子ヒコ孫シジンたうり毛利壹伎守モウリイチギムツ  
勝タケル伝ツヅルよ誇ハラフむ地士チジをかりカツル民屋ミンガクを放火ハラタクて黒田父子クロタタガタハ馬ウマの岳ヨコ  
とり城ヨリシタより有リて城下シタマ小押オシヨスを長政ナガマサ共ヒテ十六年キサシ岐井キヰを討ハシメル  
きヒと勇イサすまシタれども孝隆ヨシタカ同公ドウゴせレれまシタ長政ナガマサも既ハシメ告シマ馬ウマと  
ひひきヒヒキ若士ヒキども引ハシメル具ヒキ一切ヒツヅク如ヒシマツバ一揆イツギども一支ヒサもせレば敗ハシメル  
あらもと追ハシメルかくハシメル波井ヒヰハ嘗ハシメルの険路ヒザシロ小そびヒサシ入ハシメルあくの大石タケシキ  
の陰ヒタチよ逃ハシメルまハシメル大蛇オホヘビ小弁ヒサシとりヒタチ若士ヒキ老ヒシマツ先ヒシマツよ進ハシメルるを

一揆起合せ七八人取立て馬より突落トタリ後三歳又三歳  
小河侍右衛久是四を憲るのをと引キ一敗トアリれども長  
政の馬廻リハ真丸よ成て一揆縛ニシテ押詰ムレドモ鎧を合モ一  
揆ハ木曽谷かげより五人十人かけ出狩場の席を射テごく  
竹の鎌ナ矢よく兩の弓射テ射マリタリ改馬より下り立  
射死した色ありと近習の者ナシテ小揆兼セ退きられモ  
一揆頻々追ケタリ改馬矢ニ中アリバ爰モテ自害せ  
んと云マシを菅六三多政利已がてふ召ましヘとソトモツ  
入モ早に帶を解んとせられるを三宅三左美(後又ハ前ヨリ)  
自害の由ナリハノリビトテかき抱き馬打のせ片モテ馬を  
牽き序手モ也段をとめて我ホ生残アリテ小殿を坐す

念もなく地の利をとて引返ト一揆の奴系追崩トナシムと  
て引返く爰ハ長政の鞆乃組遣ひよみをかけてサトモ離モ  
木屋兵右衛ハ長政の鎌を持て歩立モテ陸路ト一揆長政  
と見知り隙コト付慕ふ三宅爰木屋を始ムテ墨牛張  
御小河久矣坂本七左衛已下五十人計丸く成くやひ切モ  
をもと静ニ詰寄て二里計逃ケル其はハ慕ハさうなり  
後藤ハいざもううん猩々縛のね鐵を脱捨キトモ長  
政ニシテ帰ラシタリ

後藤度々の武功多く一万四千石与へ小隈の城ニテアリ後  
よ彼井谷行軍おほく及ベ俄ニ病死トモテ木屋兵右衛  
ハ長政又向ひ後藤小河久矣は大脇病の男モテシモを親子

たまよ取らて駆よせをひかひしは兵左衛ハ誠トあらゆと  
ひるみ体ヨリとも敵追結來りあハ一番ニ討死して清目累  
かけば一さるく歎クモキ活眼力ヤとあらずで奮ムて退  
きテ其後長政逸前を福モ小禄の士皆禄を増シ  
一兵右衛ハ六百石小鉄炮の者二十人司ミトマニ賞義  
なぐらしきバ人木屋殿を岐井谷ニ罵りゝまゆを  
神木殿ハ里石にて射ハキチムんとりハ木屋我も左思  
子よ此憤キバ首をも刎ラモチムとあらずもけも  
行キ是より後も軍あづ度ごと大言を吐チヒ  
只今寵愛よほど奴系の中ふ武者振の悪キ者あバ  
心を与フん輩我そひ知りとひきわば軍者破ハト勢の

いたる口に傷されあぐと傳タミバ今之禄を削ラ  
アモロハキニ事よと笑ひと我  
孝隆ハ馬の岳は矢倉ニ上ア長政は従軍を勧テ笑ひ居  
らまうクば側ト危く疾加勢をきさせりとロクナ  
ひきとくりやく引ちまきかる味方れ真丸ニモリ教キと  
道を引退くハ吉き情ちよべー危ふ所もなーとひもれーケ宋  
一也改事故なく引立されり長政敗軍を口惜しそ  
引立り夜の相手被く聖志ク孝隆物を呼て弱敵を  
バ想ニ初の勝ニ勝ムするかのく勝ちられバ必敗の本うりと  
戒らまく塩屋善七郎より侍長政の近習よ仕へゲ京  
小使立此日の暮ジよ帰て長政の寝所へ行クサ敗事

非も亦記事よりさぞうの老臣小弁を捨殺一殿をも捨く  
逃きうとゆく殿もよに討死のふうてりひき何とて敵よ後を  
足せりや父祖の高名小瑕付やこそ口惜され善七郎マツキが墮るの  
傍よ立カタハラバ鎗を合せ一揆イギ奴ヤハラ逃立マハラ引取ヨルヒルべたよ後若  
めうきうも見振スルミ也よつばや重シテ一揆と軍アーミーにんよ必死と  
思召サム立マハラまよみて座シテを立マハラバ長政も醫モドリともひそ  
切手カツタ休タク翌日善七郎又タタタあまがち口惜マツコシとあらられ  
れひそ一揆押寧マハラヨセひそ先ササシ切崩カツボク耻ハナシを雲クモリだきへ若  
七郎ハ赤馬アカマの先ササシく討死せん逃マハラ奴原ヤハラも励ハサウまれて軍アーミー  
やマサニ鬼神カニシなうとも恐マジふ足シタと云慰マツシめられバ長政  
起上マサニ物語モノガタリせよれども長政ハ面目マスクたゞして父の前マサニに孝隆ヨシタカ  
九四

ハ必死マハラを期タマリと哀マサニ老功ラウヨウの老僚多タタタ長政マサニ差添サシタツて  
やマサニ下シタ知シテと禁マサニせられマサニ一揆又タタタ上毛郡カミモクへ押寧マハラヨセされば長  
政少限ヒツクの海近マリチホきふせ山マサニ上シタ待マサニかくくよ圓マツリ小引マサニ受マサニ一揆イギ小氣マサニ  
出マハラ馬アカマのかけ場マツシよくりりきマサニバ縱構マサニよ兼割マサニ一揆敗マサニ小すマサニを  
追立マハラタテ鬼木塩田カニキヨシタをマサニ者マサニ討マサニもあマサニかよマサニくるを長政  
塩田ヨシタ内記マサニとよづくマサニ討マサニ尚マサニもかくんマサニせられマサニを老マサニども  
馬アカマようマサニ起マサニ下シタり押マサニへマサニ陈マサニを老マサニへマサニ塩屋ヨシタ善七郎マサニハ敵マサニの中マサニ小  
兼入マサニ鬼木掃マサニ於マサニうマサニとマサニ右マサニの方マサニを見マサニまマサニバ長政敵マサニ首マサニをマサニ、  
ママサニハ又マサニ馬アカマ引マサニ打マサニ追マサニ詰マサニて首マサニ二マサニ取マサニ一マサニ痛手マサニ負マサニて精神マサニ  
舌マサニきマサニるが尚マサニも若殿マサニの功名マサニを問マサニて猪マサニや先日マサニの恥辱マサニを雪マサニ  
ゲマサニひぬ此上マサニかマサニひ重事マサニたマサニと云マサニ長政善七郎マサニが枕マサニ

元より居よりれりうば長政の手をせり此後能心得りて殿ふ付  
死りきへとよ者があまこと事よりと云バ長政涙を流リ汝を先  
きうちもその残多さよと咽をもれバ善七眼を見宍見先の頃  
諫めやせハ必死を思ひ定めゆるゆゑよに今度の高名こそ  
めでまされ今生の脚目見呂今を限まゆり人ハ一代名ハ末代と  
すすみといひも終らむて空一くなくとも比類なむ者な  
里と云うて昔日孝隆火隈ニ來りて對面一若た考ハ嚮る  
事なくてハ思慮の練ぬりのぞク終の勝を計し口八勝べた  
とあくちへバ敗を取たり良将ハ時より緩む見ゆまでも卒  
余は軍ハせどもゆゑよ終の勝を全くまよと教へらまぬ  
長政又押考んと云うを孝隆制して要害を設ケ無糧兵

道を塞だ馬の岳は常らまきそり斯て一揆勢ひ盡られ、毛利  
輝元を頼ミ和平一これども友房ハ病ひてかば中津川うち  
三宅三大夫波井谷トヨイ傳法寺兵、於使者往来して互に物送  
り或時三宅云々ハ友房内室なりと云、勘合由之妹あり  
婚禮あるべいふと云はばちまハ悦一と事うて能もくと  
まんやとりよ三宅云々年若されば老人と相計てこそくじ  
タノ傳法寺ハ敵の妹を人質と取んハ極べトとや因ひまん  
もト出たる三宅をねたり三宅我主君の心をもあらず容易に  
告て孝隆がも告遠リカバ密謀をもく三宅よ孝隆書を与  
縁を結ぶハ末頼母ノ既事うれども例の急忽たゞへとぞおき

タクニ三宅侍法寺小語もて潛みを書を取出して刀せ吾を  
ば常ニ麻忽者と戒めが世度も又ありといへば傳法まえ  
ハ既に届けられたりとほびかくと友房又告て是より  
心立あく中津川へ出べたゞぞ定アリ三宅又迎あゆけ  
友房三百人計多く中を打立テ三の丸は大もよて人を  
畠次第減じて之本丸のすき院にて對面あり吸物を口  
ノ酒ハ小川侍右衛門より賀村太郎左衛門肴をもよしと相  
団又傳右衛門一の太刀太郎左衛門二の太刀と定めたり長政  
盃をさうる時村肴を持て出で持て臺を友房小  
投付飛かり眉間を切る小川おもてくと脇指を抽て切  
付さばくと遙く友房即付きそり供の若きバ所を示

テアテ  
手當トマ物臭レキモカ也鎗すくみよて殺シぬ波井谷へ  
軍兵を指向て打滅されタリ小川賀村一二の定ヨリ小遣ひ  
トバ小川怒ス其夜賀村レヒムハ岐井を吾初太刀トスベ  
キヨ先を越き面目を失フリいよと同型村打突ヒ左也  
ヨハ理ナリ能ウミトヘ年をリバ吾ハ弟ナリ汝功名も  
四度及び我ハ唯二度ナリ是をどかアリツカのそとふ  
先をさせテ我後まづバ是こそて面目を失フリハベラモ栗  
山又我兄の多モ傷ト有バ前後をあうそりんす似管  
3ベーかく劣アリ我ニ争まんハおこうけなー只免され  
とシヒタミハ小川赤より心易さず有バ但心安くも切  
モトモト

小川もよく聽入をきくとぞ、或ひとも

キレ

○秀吉北條を付し、附諸將浮島がるゝ並居て秀吉をすら  
秀吉系附威の物具にて唐冠の曾日黄金をちうだもん、  
太刀佩て土俵に大あく羽壷と征矢一筋指仙石權幸も  
らせ朱は滋藤の弓持く七寸五分馬又金の瓔珞ノ弓  
甲かけ玉輪ヲ歩きやです通らまくるが 東照宮信雄  
共に出逃ひまを見て馬より下りいよ貳心みことゆきり  
いざ一太刀無くんと太刀柄又馬と無ら 東照宮左右  
の人々向ひせ終ひ軍始ふ太刀よりを廻れ門出の目ゆく  
ひと高らか仰有られバ秀吉仰ともいひて又馬より  
通らまくる

秀吉此出陸の時濱松城より宿せしもト多作  
左衛門折言に侍使より歸アラシラゲ旅装の便  
多く諸将れ中少進し出 東照宮をひへかけ奉  
アていふ殿ハソウトカく愚心よなうめん國を  
持つ人皆城を人よかどりやしさらバ女房ちよんふ  
かくちもんうとぞ罵アリ。 東照宮彼ハ乍み作  
たまつとア剛の者多くいへば家久一く眞くえ只今  
のやうあることを申すてひ無礼の詞をやひと仰有  
けよか事ヤ人多くみべきやと賣一あり  
作左衛門ねあた人たうとく小三奉行の中よ命

せきき政を執り小甚仁愛の事あくまで獄詫を  
断る理正しく四民服従あり 東照宮の

神慮淺く御事あり

○東照宮小田原に向ちせらふ时先陣も榎原康政  
と命あられ井伊直政御旗本と定めましゆ走政  
毎を先陣を好ゆまつ小此時と少一と辞退乃  
氣毛なり小田原より秀吉かゝ人の僅  
よ引具せらまつとなく唯今取廻みて討えべき时  
よりと進免ヤセズと 東照宮ゆく召入らまざ  
トシばさくバ先阵さんといもまく、我

○山中の城を責る时木村常陸久師春が士鳥井源八郎

先づて城又付名ゑり羽柴藤五郎秀一ヶ士磯健平  
三郎彦之丞ア汝ハ首を源ハとせりとする譽の士され  
ども田舎そぞちある辰武功を辨へに斯る場所ハ人を  
あきき氣後ますゆあらわ爰よく名乗まくハヨム公  
付く我先よと進むゆゑよくちよ獨功名もあり財物  
のゆもとよど名をすじに處せて名乗たりと笑ひされ  
ば名井丈て平三郎ハ志の士と聞く小真の士志と云ふ  
さうよ人のうまれたる時と尚あるよ名無く人ふ心を  
付力を添く多く世人を用立てて武士の義たれ獨  
高名をせんとする小事ありしよ口是どと答へ一ツ平  
三郎云うとすなうり

○小田原を囲む時國清公の攻口ハ搦手北山北上ちり目の下  
又見おもー一鉄炮を打ち入る小城中よりあげ矢小うつ波  
炮烈一く士卒進ミ第も時南部越後銃口を立ふ向て  
打せり其の玉雨の降がめくたゞり一ば城中ひも下を  
足海一鉄炮を山を射小あべ透間あくあせて攻破アモ  
○同時九鬼大隅守嘉隆日本丸とよ大船を乗セ南の海上  
を取巻タリ此不ハあく底もく東風吹時々波浪山嶽を倒  
トかくもがめ一船をかけ並ミ事思ひもよし内所たゞり  
秀吉城をかこやれ一間五十餘日風靜又波穏うたう是より  
一て小田原海辺風もき日を上様日和といひあらそひと  
○同時 東照宮伊奈熊藏を召く仰出さる事ども

其時伊奈去年より兵糧の用意一て沼津又運びきま  
然る所は舊根山中又穀物の價江尻沼津とお岡一遙々運  
漕せんとく爰より求る事御べー心得がくたすなうとヤ  
クもと 東照宮宇一召夫ハ長束大藏大輔が謀り長束  
ハ武功徒まくてもあくされども斯る様ハ長じる者な  
まバ秀吉城主とて寵せられどもかく汝が職より兵糧  
運漕の事よく心にべき心得がくとくハ吾も心得がく  
と仰せられバ伊奈汗を流して退出一と  
○同時蒲生氏郷金の三蓋菅笠の馬印ゆきされとてやされ  
がく今度小田原ハ武功よりて立む事よまうせんねと

いをまく一うバ 氏郷 今度の軍小人の目を驚かすうさうだ  
ハ討死となりひ定め繪像をかへせて日野の菩提提まよ龜  
打立まくらも形て五月三日れ夜かき雲アモクモ終ま城中  
小條十郎氏房が持口より夜討をもつてうたり氏ノモ今夜ハ  
夜討入べきよ懈スと下知せられ一ふ果一して廣澤兵庫  
秀信豊大將より押寿より氏ノ物見の兵町野万をも  
よ行きぬ弓取直一指詰引詰討タマドモ叶ハシテ引  
返せハ敵進ミ来ミ柵木を打破る蒲生源左衛門成田を  
中務直政町脇右近幸和切く出爰をち途と戦ひうり氏  
郷銀の鯰尾の曹は猪を一め  
氏ノの許ニ新ニ仕す士小吾家かく銀の曹を乞ム  
兵度<sup>冬</sup>ごとく真先ニ進ミ出く勧<sup>ハ</sup>此男ニ芳らを  
あまゆづ<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>氏ニ彼曹著て毎も先かけ  
らまく<sup>ト</sup>とぞ  
兼て一丈餘の鎗を設け置まく<sup>ト</sup>を提げ追立<sup>ト</sup>進すれ  
タモ小度<sup>ヒロサカ</sup>兼て鉄炮を後陣<sup>ト</sup>並べ玉<sup>ト</sup>されば追走<sup>ト</sup>まよと  
打立<sup>ト</sup>り度沢ハ聞<sup>ト</sup>利の者ちう<sup>ト</sup>鎗を横<sup>ト</sup>片足<sup>ト</sup>を堀  
の中へ踏入<sup>ト</sup>と大音上一鎗キ<sup>ト</sup>んと呼<sup>ト</sup>を氏ニ<sup>ト</sup>て飛<sup>ト</sup>  
ア突合<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>バ蒲生左衛門<sup>ト</sup>可<sup>ト</sup>五郎<sup>ト</sup>治<sup>ト</sup>田又左衛門<sup>ト</sup>  
かけ來<sup>ト</sup>とをのき<sup>ト</sup>んで攻戰ふ度沢ハ今宵夜討の大<sup>ト</sup>  
度<sup>ト</sup>兵庫一番鎗と高ら<sup>ト</sup>に呼<sup>ト</sup>もう<sup>ト</sup>るを氏ニ<sup>ト</sup>目<sup>ト</sup>かけ  
く堀の中<sup>ト</sup>飞<sup>ト</sup>入<sup>ト</sup>て擊<sup>ト</sup>とんと面もあらずと曾の鎗を仰<sup>ト</sup>

鎗を立延き立まゝよ敵兵二人氏の銃を取んと  
せきり七八度又及びは氏の度深をバ討められり  
寄手筋もげく戦ひそれば度深もかたまくとやる  
さん城をさうして引退く氏にひづくまでりと云まふ先が進  
んで追まゝとも門を閉て鉄炮を持せざり返されりふ  
曾ふ矢二筋折り物具よ鎗の疵透間なく十文字の鎗さ  
さくのめくたり一バ秀吉感状よかの馬印免をまくり  
○武州八王寺の城主小条陸奥ち氏昭ハ小田原より家臣田  
守一ときより前田利家上杉景勝攻むとて先よ降参し  
くる小条氏邦ニ使を城へやしセ小田原既ニ破まぬとく城  
を渡りてと云送る中山近藤将野才役ノ氏昭降ませば

證書を賜りて城を出べき旨下かどべ然らばして降  
糸せバ士の瑕瑾ニ氏邦がめき脇病者ハ一人も城中よりば  
と名へたり利家景勝も其義ニ驚びとひども抑止べ  
ざれバ一万五千の兵をもて圍まく甘糟清長攻入て火を  
かくす將登一菴近藤助実金子三郎右衛家重死狂ひ  
かく出射死を横地監物ハ氏昭の弟一北長臣も火を上  
まば今日を限アホムニヨリ戦ひるよ寄を討す者多  
中山勘定由家範ハ武勇のね持よ八条修理満朝が馭法を  
伊へ関東毎双と世ニ称せんも人なり大敵よサトモひれ  
アモニ二百計ふく突く出晏を立ましと切て四つ小寄を  
手を入替攻まバ僅十五六人より討なされたり利家難中山

ありあると向ふ松山の降人根岸主計定直が妻ハ中山妻と兄弟あり小岩井雅樂助ハ中山が馴法の弟子あり  
をナニ利家疾中山よ味方ニ属せりソレにて兩人を城中へ入らまシ中山既ニ自害して其妻も自害しシテガマ  
ボ息かゝリて有クミハ祠をかもリて弛帰マサとソバ利家  
大ニ惜やれタリ監物ハ切ぬリく逃出タリ小條家園東の  
城ミ多シとソビモ豆州葦山の城ヲ亦ハヨリく降参  
コハ王寺の兵城を枕ニ戰死セラムダキト 東照宮宇一古  
其義を感ド里名を中山う嫡子助六郎昭守二男左兵信吉  
禄邸ノリ昭守子信守六坂の軍ニ功有信吉ハ後水戸中納  
言吉仕へく備前守と称シ狩野一庵が子主膳も仕へマリ

○八王寺の城攻小城兵切出死狂ひと付利家の小性大者  
藤岳一番首を取キ處ニ兩森彦三郎達て首取て利家の  
の前ニ至リ実検ニ備ハ一番ハ大音ナリトテニまゝ音の  
帳ニ記セリと利家大ニ憲セリ其比大音ハ利家の勘  
氣を蒙リ居ニ至る數度ナリヒテ姓名を名ナリ久遠人  
一番棄とソラリと知テマリ

○北条达びく後秀吉石垣山の本陣ニ諸将集アモ酒宴小  
及ぶ時信雄ハ舞の上モトツアリシ一曲就キ文と秀吉  
ノモリシ小信雄吾を侮ルと口惜くやまシ不吉の詞を  
舞葉シテ秀吉から悦の中に思シキ事ども心得シ  
とく那須追々モナリ此時ナリモ半ё修務の士を真

せられりが僅か打連て那須より赴きぬ時を計らひ勢ひ  
を知り無益の如き小國を失ふまゝすのうとてまと

人されひらへ

○小條滅亡の後秀吉坂部岡江雪齋は汝先年小條の使と  
して上京し約せし不忽肖て名胡桃の城をえんす  
氏直の  
謀計すや又汝が詐たりと責問セヌトハ汝直よやさんと答へ  
クは秀吉太よ怒り手枷足枷を並べ江雪を呼ゆ一刃を  
奪ひ左の手を引張庭上より引居て後秀吉罵ヨレバ曰汝  
が約せし文ふ背くこも誠よ憎むよ悔うむ且日本國の兵  
を動く主君の國を滅サリせし事下汝よ於て快きやと譴ら  
るふ江雪色も変せば氏直更よ約よ背くの心あくにき

郡の士愚よて名胡桃をも終不弓ユミヤ矣よ及て小條の家にひ  
ゆ事江雪コウセツが思慮いんともすくまねのれりび誠よ家の込  
びぞき運命ウニスイよらんあまく日本國の兵ヒキウラより受ふこと  
小條家の面目なり此外アベた事ち一疾トククを刻られんへ  
トつ秀吉顔色ガラシヨリテとケて汝ハ京より上せ碑ハリブよ歸カムへどひ  
一タダゲン大言を吐く主君を辱ハバカめひとと大丈夫とりぞ一命  
を助んワケよ仕へすと許されユル坂部岡を改めて岡カガ称  
くろハ此時よりの事たり

(秀吉鎌倉の鶴ヶ岡よりて八幡宮の戸を昇りて頼朝の像を  
握る我と仰きと二人すり然までも頼義父子鎮チ府  
平  
アラモトカケラが脊カガをすきと微賤ビヤシよりゆて日本を掌に  
握る我と仰きと二人すり然までも頼義父子鎮チ府

將軍とて東國の者ども久しく親しも多きを蛭ヶ小  
鳥うへ兵を起されしよ関東の靡き從へるも謂まなきよ  
あくと我ハ土民の中より斯日本を思ひの優すれバ功尚  
高一とりづ一とりそれなり

○秀吉陸奥よ趣く時宇都宮にて佐膳天徳寺を呼  
野州佐野辛沢山の城主佐野小太郎 藤原宗綱 天正十  
三年討死して子なし 家臣連判の起請文を小畠に  
送る 氏政の弟氏忠をりて家を後宗綱が伯父天徳寺  
守伯ハ佐竹の一族が争を乞て佐膳のあを嗣んとする  
も是を重ひも了伯小夫より京都よ趣き黒谷よ閑居  
せよと秀吉小條を伐る時に遂とせられり

物語させく聞ましよ武田上杉の弓箭盛なり一事を  
タキバ秀吉冷笑ひいゝ天徳寺謙信信玄とリ坊主も  
疾死しゆゑて幸なれ今ニよなぐへ居ハ一人上ハ薙刀をか  
くびをせ一人よハ吾輿の先ある朱金轡を揃そく馬のあよ  
召具をばら此世よなきバ力なりけり乗車がり坐備  
まみだらうやまうとぞつまきゆる

○秀吉陸奥よ赴き蒲生氏郷よ八十万石の地を賜ソイク  
氏は退出一柱よ倚かゝりて後ぐまきを山後の某居寄て  
辱く思ひまきん事をうりとひよ氏郷私語て吾都止  
き所かて小き國一つ駆りば終小天下よ旗を揚げんよを鄙  
棄られまきハ何事う仕出もざき志めかく成らま

ておほえに涙の流るよとぞ傳へれども

○天正十八年奥州葛西大勝一揆の時氏郷名生の城より  
會津小飛脚をもて鉄炮の玉薬を人よしとがめられず  
やうと計りて運び来ましと下矢せられバ山伏をかく  
ひ笈の中よ玉薬を入れ頭中螺貝杖を携て湯殿山よ請  
ありまゆて送りまく是蒲生左文が謀たり  
○蒲生氏郷笠井大勝との軍よ佐久間備前内膳足守  
を先陣とせらるゝ下知せ事氏久の心よ叶ひ此兄  
弟ハ元秀吉よ属せし秀吉より氏久よ歸りて侍大將  
氏郷明日の軍ハ神田修理外池信濃墨野左内蒲生源  
左衛門を除せよ佐久間足守ハ見物せよとぞ下知せられ

タム先陣の士大將六人相集り佐久間兄弟の軍立あきとて  
死伍すれぬおもく付死しシテモ已ダ羽キ捨く口汚名を  
出まくタゞのよき斯仰と秉てかひもたゞて浮け大  
將の恥辱ちり然らば進退の節肉なま一せんハはふほ  
とく先陣の軍兵を打具一平野よ押知一かげりのまゝ  
五度よ及びて尚調ひば六人立とて明日比軍ハ  
大事ちるをかく小原よ及びゆよ人之の准據以のみ  
調ひそいゝかも能心得りと再三詳よナマセナシ、あれを取  
下知ちるを進退節よあらうトシばさくハ明日の軍ハかりよ  
終たゞぐーと悦びいきみく果して敵を功ちびけ大勝を  
得たり浅野長政秀吉の命より陸奥國よもくハモリの

御宿近引の國よ當若る終小見聞及ばずも亦うりと寝ら  
まことと氏々も大方すくべ悦びく六人よ驚狀を与へて  
りづくの拂添て賞美ありづく

○伊達政宗蒲生氏郷の威よ壓すと心中ふゆく憤りて  
氏々を殺さべき事を多事して数代家よ仕へー若の子よ  
清十郎とりて十六才よ如き者容貌勝まさて艶なりしふ  
密よたゞかの事を悟り聞せ田丸中務少輔が児小姓小却で  
奉公させらきより田丸ハ氏々と姻家の就くとされば未られ  
ん時便を伺ひく刺殺せとの事たり清十郎が父の方へ尋  
ね書を聞可ゆて改められり事起すて其謀乃泄るし  
は清十郎を獄よ押入此事を秀吉よ告るとつても秀吉遠

○主慮アリて強く伊達家と和平せらす氏々清十郎を  
呪シ一吾過て罪あき義士を獄よ入辱を与へよ其のもの  
為よ命を捨て忠をりて賞もく小修あくとく伊達  
家よ歸るべーと禮義正しくりてちくと帰されり

記すす小清十郎が姓をりて一わたりたるより  
○氏郷の許よ佐木が燈とりて名高尼畠あり細川忠興など  
狼心よ我よ賜ひまとをまくは宜理某是ハ世久しく傳ハ  
る物よてふ似たる燈を拂つてといひされハ氏々  
とつた名をとくハりひてやもあはかのとていふとくん

蒲生ハりゆ江州の主として佐木の古より氏々伊勢は

松坂十二万石なり。一が後令津と賜。元々四十才の頃

名

なり。佐木秉楨<sup>サキミツカ</sup>が子四郎太閤の時僅二百石与へ太閤の呪

ひ席<sup>セキ</sup>小呼<sup>ヨビ</sup>なされしが伏見にて太閤の前より退出する時

氏<sup>ウヂ</sup>之昔<sup>サトヒカシ</sup>の故<sup>ユエ</sup>四郎<sup>ヨリ</sup>が刀を以て後まづとあり又安立郡小

川あり向ふ<sup>カタハ</sup>黒塚<sup>コトカ</sup>安立<sup>アキタ</sup>ハ氏<sup>ウヂ</sup>之領地<sup>レガキ</sup>ありふ黒塚

と伊達政宗の領地<sup>アキタ</sup>ありとて争ひあり。ふ氏<sup>ウヂ</sup>に平道盛

の歌<sup>ウタ</sup>

みらのくれ安立<sup>アキタ</sup>がゑのよゆくもふくわむとりふよすと

トトよす事<sup>トキ</sup>うりいうふとやされふせし人黒塚<sup>コトカ</sup>ハ安立<sup>アキタ</sup>がゑ

よ属<sup>フジ</sup>一<sup>ヒ</sup>事<sup>トキ</sup>分明<sup>フシミカ</sup>ありとて政宗<sup>アキタ</sup>争ひとやうてく

○本<sup>ホン</sup>タタ中<sup>チ</sup>勢<sup>セイ</sup>大輔<sup>オウブ</sup>名<sup>メイ</sup>篠<sup>ササ</sup>上<sup>カミ</sup>総<sup>ソウ</sup>の小<sup>コ</sup>瀬<sup>瀬</sup>十万石を賜<sup>タマ</sup>り一<sup>ヒ</sup>ば

小瀬<sup>コタキ</sup>よ趣<sup>オモ</sup>き土岐<sup>トキ</sup>彈<sup>タマ</sup>正少<sup>シヤウ</sup>弼<sup>ヒヤウ</sup>賴定<sup>タケル</sup>入道鹿<sup>ケイガシ</sup>岸<sup>アシ</sup>の半<sup>ハ</sup>どもを呼<sup>ヨビ</sup>出<sup>ス</sup>  
一<sup>ヒ</sup>禄<sup>ロク</sup>与<sup>アケ</sup>へうう<sup>アケ</sup>彈<sup>タマ</sup>正少<sup>シヤウ</sup>弼<sup>ヒヤウ</sup>賴定<sup>タケル</sup>入道鹿<sup>ケイガシ</sup>岸<sup>アシ</sup>の半<sup>ハ</sup>どもを呼<sup>ヨビ</sup>出<sup>ス</sup>  
少<sup>シヤウ</sup>弼<sup>ヒヤウ</sup>と称<sup>シメ</sup>一<sup>ヒ</sup>武勇<sup>ムヨウ</sup>の誓<sup>ハシ</sup>有<sup>リ</sup>一人なれバ此<sup>コト</sup>を問<sup>トク</sup>よ喬<sup>タカ</sup>長<sup>ナガ</sup>ヤハ  
万<sup>ヒシキ</sup>喜<sup>シ</sup>常<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>房<sup>ノ</sup>州<sup>シ</sup>別<sup>リ</sup>里<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>義<sup>ギ</sup>高<sup>タカ</sup>と<sup>リ</sup>矣<sup>アリ</sup>を<sup>シテ</sup>ハ<sup>シテ</sup>敵<sup>アシ</sup>を<sup>シテ</sup>忌<sup>ム</sup>らせ  
んお<sup>リ</sup>小<sup>シ</sup>舞<sup>マツ</sup>臺<sup>テ</sup>を設<sup>セ</sup>け踊<sup>アリ</sup>を<sup>シ</sup>城<sup>シ</sup>門<sup>モ</sup>を明<sup>アハ</sup>か<sup>シ</sup>て是<sup>シテ</sup>  
は<sup>シテ</sup>船<sup>ボ</sup>著<sup>シ</sup>のけ<sup>リ</sup>一<sup>ヒ</sup>き<sup>シ</sup>を平<sup>タラ</sup>一<sup>ヒ</sup>里<sup>ミ</sup>見<sup>ミ</sup>義<sup>ギ</sup>高<sup>タカ</sup>と<sup>リ</sup>矣<sup>アリ</sup>を<sup>シテ</sup>ハ<sup>シテ</sup>敵<sup>アシ</sup>を<sup>シテ</sup>忌<sup>ム</sup>らせ  
と<sup>シテ</sup>古<sup>アガ</sup>き門<sup>モ</sup>不<sup>可</sup>よ打<sup>タカ</sup>て出<sup>ス</sup>忽<sup>ハシ</sup>切崩<sup>カタハシ</sup>一<sup>ヒ</sup>き<sup>シ</sup>是<sup>シテ</sup>  
よ<sup>リ</sup>土岐<sup>トキ</sup>地<sup>シ</sup>よ攻<sup>ム</sup>入<sup>ル</sup>事<sup>ハシ</sup>は<sup>シ</sup>と語<sup>アリ</sup>是<sup>シテ</sup>巴<sup>タカ</sup>名<sup>メイ</sup>篠<sup>ササ</sup>て土<sup>シ</sup>  
岐<sup>カタハシ</sup>ハ甲<sup>カタハシ</sup>越<sup>カタハシ</sup>の兩<sup>リ</sup>雄<sup>ヒメ</sup>孫<sup>モリ</sup>も芳<sup>アヲ</sup>らぬ人形<sup>ヒメ</sup>と称<sup>シ</sup>一<sup>ヒ</sup>苦<sup>カタハシ</sup>度<sup>モリ</sup>旧<sup>カタハシ</sup>に<sup>シ</sup>  
其<sup>カタハシ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>シ</sup>と向<sup>カ</sup>付<sup>カ</sup>ハ必<sup>カタハシ</sup>万<sup>ヒシキ</sup>兵<sup>ヒメ</sup>反<sup>カタハシ</sup>と<sup>シテ</sup>い<sup>シ</sup>れ<sup>カタハシ</sup>る

○勝頼亡びて後 東照宮甲斐と治めりすよ法度ハ信玄

よう用ひ處を改易る事たゞれ年貢ハかく納んと仰出さ  
まつうば百姓大よ悦びらへり小田原亡つて後も地を治  
めちふも又回諸民大よ悦び數百年の恩義相結べ  
ふ回りかうた

○回りて 東照宮武田家の士横田甚右衛門を召し  
信玄のすりどもねざすさせくツー口アリ時 海坊が時  
火繩ハいきりと侍奉あつ柿の殻よ石灰を入て火繩  
を染りバ年経ても用らまじとやに横田又ハ城意菴あと  
よ信玄のすをバ法坊と仰有るもとぞ又武田家より鍔をゆ  
そくほのハ敵の肉せゆよ鍔のぬらん為すりとヤスと呼召

士の軍ニ临むハされ共君のおぞゝ射伏しまさバ吾軍の利  
とあらべ一後まで人を苦しむハ不仁の業もとあれ今  
曰うう我家の士ハ鍔を堅く結よと仰せられたり

○東照宮仰よ物具の美麗たゞハ益益の事かう又重くも  
よも益たゞ井伊谷の郊ハ力も重く重き物具あつれども  
度々手取つたゞ本多中務ハさもなつて序手負つるす  
もかづ一只戦ひ易くんやうと心疑へきなり下駄ハ舊き鉄  
の笠をつらせよとよの急ある时ハ飯をも炊くべとせ

鉄の笠ハ甲州よりも下駄ハ足をくわへてや畿内の方  
よハたゞりし小丹州龜山の小野木峰殿助口之源已下乃  
者小鉄の笠をとるをもあ小其はハ少並木笠といひけ

ことなり

○東照宮関東津打入の後甲州より多々秤を造るち隨兵三  
郎といふ老井伊直政よりて関東黃金白銀等を賣す  
るより定められし秤を用ひられん事を承ひしればそれより  
今之制ハ定めさせりひきり

京より後藤徳兼とよ周物師あり 東照宮関東津  
打入の後徳兼ふる弟子を召され遠國を嫌ひて後  
藤庄三郎これ行んとて関東より入り罷せしん一ツば  
後天下を知り召バ願の一つ叶へまくとアレ何ゆうて易き  
事よと仰有り候バ葵金を四つ半切く通用せんやと至  
士となり果して波内 東照宮より  
庄三郎が

志のどく仰出されまつり今の一歩金とりよハ始ま  
まつり但一甲州よりハ信玄の時碁石金といふあつされ  
夫より前よりハ碁石金の外よりハたゞ一歩金ハ碁  
石金ニ效ひまつりやうべた又信長の時今の大富と  
りよりハ安土より始まり平野よりハ小芊やどの中  
よいと色々のね入らまんとく人信せまうたといひ  
狭箱も因縁に造り候もまつりふ又大坂の津田も  
守始て造り出んともりり

○原吉丸酒井金三郎共 東照宮の近習ニ仕へ申ル  
伏見より津庭に出させまつ時原津太刀を抜く庭より  
草履ちくよ違なく跣みて蔵石れ上より有りまふ酒井某

履シテをあくへりきバ人シテ儀シテとすシテ召子細シテを拂シテ參シテう酒シテ  
井キウツハ渠ラ原モト下總シモツの笛井フニキの城主原一郎ハラが子コよりては臣ミニ先祖カバタ原ハラとすシテ昔エカシ主君シユクンのゆきり跣スルみて炎天エンテンより居シテるを刀タマ小堪タクりしとやされば本セトを忘ワスまシテざるの士シテす  
吾子孫ハガネソンゆもめシテ、なシテべシテと大シテよ悔ギヨカシ感シテあり

○秀吉大坂ウニツチロ馬シマツ揃シマツの時千貫セニケン矢倉ヤハラ小上シナミ御ミまシテる黒クモき馬アマメの太タケくきシマツたシテよ棄リて紅レッドの沓タケを後輪アヒツよ付シマツく老シテ行シテ何シテ老シテと問シテる徳川トクガハ家の士成瀬トシセ小吉コジなシテうと申シテる  
禄ロツハシテいふと問シテる 東照宮二千石トシ与シマツへ至シテうと仰シテら  
まシテよ秀吉ヒロシキあシテき吾ホウよ奉公シマツせシテハ五万石ゴハチ与シマツべきといそシテまシテ一シ小吉コジ 東照宮成瀬トシセを召シマツかシテくの事シテありき秀

吉ヨシ仕シテへちんやシテと位シテみシテれバ成瀬トシセ渠ラ原モト下總シモツ情シテうり  
よいとやにいやとシテ汝タマ秀吉ヒロシキ小奉公シマツせシテば我ホウ為シマツゆもより  
なんと位シテられシテ小朱トトロ涙タラタラ波ハを流シ不肖フセウの弟シロ禄ロツを食シマツて  
主君シテを捨シマツきシテ者シテと思シテうシテを知シテうシテす愚ホトト只シテ疾シテ  
自害シテして心シテをあシテうシテんねシテをとシテやされば其シテよシテを秀吉ヒロシキ  
御モガタリお彼モガタリ有シテうシテ後シテ 東照宮長トシセ丈シテあシテよシテ召シマツ古シテよシテ三  
尺シテの孤シテを託シマツさシテきシテといひシテ一人シテハ成瀬トシセすシテこシテまシテと  
仰シテらまシテうシテ後シテ 小吉コジ正成トシマサ後隼人ハヤトカミとシテいシテりシテあシテりシテ  
○小條家コナリ亡シテく後シテ 東照宮甲斐セイ相模シモツの塊シテ三塙嶺ミサカミツを待シテ歩シテ  
やうの時シテ永禄ヨリ年中シテお戰場シテを待シテ覽シテあシテむシテ山シテあシテる  
ノ左信玄シテ兵シテを押通シテキシテすシテ軍シテ小勝シテ一シたりシテ小条家シテ

武畧 小拙く山林を伐めり。さるをか一 生茂アミタ  
ひうで信玄陣をあくべた山を林小せよと仰出されり  
○秀吉伏見より15日廣間小切れふ 五腰の刀と刀と  
試よ其名をいもんとてけまつ小違ハざくられバ前田  
以誠よ神智のおりぬよとおきどりされバ秀吉が笑く  
何の子細もなれどよ秀家ハ美麗を好むが故よ黃金  
をちうだめし。刀是ちうべー景勝ハ父の時より長剣を好  
めりすの延き。刀を是よあてより。利家ハ又たとへと云  
一時より先陣後殿の武功よより今大國を領されども  
昔をこすれ草巻。柄の刀是他主。又思へ  
ア輝元ハ異風を好む。まちう体よか。そりたせむ刀是  
照宮の御事をと

○江戸大納言ハ大勇。一劍を頼むの心。え縁ひる  
○謙信の許よ赤小豆粥竹侯兼光。谷切にて三の刀あり。行侯  
兼光ハよし。越後の百姓。おもて。ふあ。時山中を通。一  
ノク。小遠ハざりたりとも。江戸大納言とハ 東

雷烈。一鳴き。スバ。ありや落。少もひく。刀を抽  
頭。小抜。目をあざき居。や。空晴。小刀。お鋒。  
よう。血流。き殷。よそ。す。ア。又或時大豆を袋。小入。てゆき  
よ袋の縫。びよ。一粒。づら。ちよ。とく。も。う。鞘。小。づり。て。二。ふ。さ  
く。バ。怪。スア。よ。鞘。の。じ。ま。て。刃。の。縫。小。か。さ。く。一。小。當。

アラム多ナリ 双刀を刀とて竹俣三河守乞得レゲ 謙信後少  
さくまそり 弘治年中川中島合戦小信玄の兵輪形月平  
大夫との兵鉄炮をもてゆひ一を謙信馬を棄棄せ  
一刀ニ切伏スカケ通られタリ後ニ甲斐の兵輪形月平  
小輪形月ハ物具カケス切ミ持トモ一兩箇ハ二の見通の上  
より切放レムリシムキ刀小クカクハ切ミトヨリヒアム  
則かの兵先れ刀をリタリト景勝の時京ニモ研セテを越後小  
て人々ニエセシく京の水ふく研されバ鋸の先は更勝毛  
と挽キシテ三河ち熟シと刃く此ハ贋物モテリ子細ハは刀  
もと引きよリ上一す背小毛の毛を通スベキ計の穴せん毛を交  
外よハナスリマヤハサシバとて竹俣を京ニやりてけざレ求

ト真の兼光は刀を清水の南坂より取出シカくと石田三成ニ  
告て贋物トキテ老十三人の岡ニシテ死刑せしれど竹俣  
越後ニ持ゆてかの穴ニ馬の毛を通スベキ計の穴せん毛を交  
其後此刀太閤小奉る秀頼シテ落武者毛ニ和泉河内の方  
行坐まうと聞えアラバ此刀を献む老ニハ莫金三百枚継  
ベキトモ仰出されレモ其行方終不知人ナリ  
○本庄越前守繁長ハ越後の勇將トキテ後景勝上杉十郎憲  
景ゲ禄を本庄ニ与へらる本庄知事の庄内大宝寺義典と號  
猶ニ二男千勝丸ニ庄内を与へタリ本庄最上義光と士羽の  
十安が表もく軍志ノ時最上は軍敗小せず小義光乃士  
大村東漸寺右馬頭口情をる少ヒ取てモ首一つ提く

越後の兵又翁も繁長と目よかけく只今敵の大将を討  
に実檢よ入きをもんとまく馬よ鐙を合せかけたて正宗の刀  
を以て曾を打つ明珍の曾なり一ヶ筋四ツ切削アリテ繁長  
右手曾を切く落一首小添て景勝小切アリテ刀をバキ落  
石一与へらまう後故スミ 東照宮の侍刀とちり本庄區  
家とひへるハ此刀なり

○加藤嘉明の曾ハ形を富士山よ造アリテ名をも別富士山ト  
リノ具足の胸小天人のすみ小身アリモト蒔繪よあらう竹中重  
治が曾ハ一の谷明智秀俊が曾ハ二の谷よりよ攝州一お谷二の谷お  
並び又柴田伊賀守勝豊が曾ハ鉄蓋が峯とりふ星ハ一の谷よ  
アリテく時く時く山なまバが名付一と云やば浦壁若狭也アリ

○小水牛黒田長政の大水牛日根野が唐冠の曾原隱岐也十王  
頭福島正則の四あく鹿の角本ヨヌ忠勝の佐藤四郎が曾蒲す  
氏郷の銀比鰐尾伏木久内がりし蛤武田信玄は諏訪波性秀  
吉の八日戌月加藤清正の長鳥帽子矢田作十郎が鯉の曾孫堂  
秋七が帽子をどりへ多一細川忠興つね山鳥比尾の曾を著銀の天  
も名高一関ケ原の軍よ忍奥のかれ山もちの尾丸曾を著銀の天  
衝の指物なり一少遙よ見て唯舞衡れやく小有たりと  
東照宮曾と指物と咲あひく面白一とて乞得せり  
台徳院殿ユキアセられ

○信長江州小谷の城攻小伊藤七藏先ケイーキモ小從者五  
付キム左上帶ききて刀も腰差も墀下よ落つ七三ばかり

ひしすばり乗込で柵の木うみて敵三人うちき伏せ功名一も  
七彦父を若狭より相州は人ゆく武者修行一尾州前田村  
より居候に信長はなされり七藏尾州三本木の軍に事急  
よて編笠立をかづりあぐり一番鎗を合せとく信长大は賞  
められて編笠と呼ましより後赤乃吉小仕へとなく功名も

うは紫袖井筒の紋度袖の小袖をふへらましれバ甲の上よ急  
きう赤乃吉の旗奉行とゆき

○井伊直孝おもく人毎具足櫃を掩そく早くえ出志  
を用意せむ老あくえがくらも遅まやうのまあくバ何時も素  
肌よくかけ付くことをよき具口を著しと見るとの差あ  
わざとあくと申されども

常山紀談卷之九 終

